

10年のあゆみ（監督回顧録）

さらなる飛躍を期して



関西大学レスリング部
総監督 横山 博行

このたび、わが関西大学レスリング部は創部60周年を迎えることができました。私は前回、創部50周年の記念誌『青春のパライストラ』を発行した1997年当時は監督として、そして2003年からは総監督としてチームに関わって参りました。まず、この場をお借りして、これまでわがレスリング部を支えてきてくださったすべての方々に、衷心より御礼申し上げます。

さて、盛大に創部50周年を祝った1997年でしたが、現役は、春季リーグ戦において2部最下位というどん底に沈んでしまいました。本来なら大勝をもって華燭の典に花を添えねばならないところでしたが、部員4名という当時の状況では、如何ともしようがありませんでした。当時、『青春のパライストラ』に寄せた拙文のタイトルが「冬来たりなば…」、その時点ではSF入試制度が開設されることなど想像さえ及ばない状況でしたが、最低辺まで落ちてしまったからには、あとは這い上がるしかない、という思いでした。この50周年の年が、ある意味で、わがレスリング部にとって一からの出直しのスタートラインとなったのです。

しかしながら、回顧録にも記したとおり、苦しい時期はさらに続きました。昨今の社会の状況や学生の気質を考えると、競技種目にもよるとは思いますが、素人の学生だけで体育会の部活動を隆盛に導くのは容易なことではありません。しかも学生レスリングの中心は7階級で争う団体戦です。部員総数が7名に届かないような状況では、好成績を残せるはずがありません。否、現実的には、好成績どころか、常に廃部や休部という最悪の事態と背中合わせでありました。この苦しい時期を戦いぬいた部員の

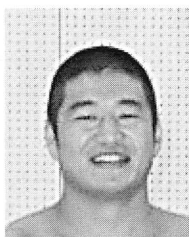
みんなと、献身的に支えてくださったすべての関係者のみなさま、本当にありがとうございました。なかでも、社会人として多忙な身でありながら、コーチとしてよくマツトに上がってくれた山本、相田、谷山、小寺の4氏には、本当によくやってくれました。ありがとうございました。

さて、そのような状況が続いていた2003年、私たちは地域の子どもたちを集めて、指導陣だけでなく学生たちも一緒に指導する「関西大学レスリングフォーラム」を創設しました。この試みは、地域社会への貢献はもちろんのこと、教えることによる学生たちの成長や、関大レスリングの人脈の拡大など、多くの効果を期待して立ち上げたものです。そして、言わずもがなではありませんが、「フォーラム」を通して育った選手が、将来わが部に加わってくればという願いを込めてのものでもありました。ユニークで先進的な試みには多くの障害が付きものですが、発案者である顧問の伴先生、松浪OB会長ら多くの方々のご尽力によって、この小さなクラブはしっかりと根を張ることができました。とくに、この事業に対して多大な勢力を傾注してくださった故田邊先輩、西山先輩、佐藤先輩、そして創設以来現場を引っ張って下さっている石井先輩、本当にありがとうございました。

そして、2003年度にはSF入試制度が開設され、多くの有望選手が集まるようになりました。あれから10年、チームは1部に復帰し、ようやく春の兆しが見えてきたようです。ここでもう一度気持ちを引き締めて、本当の飛躍へとつなげていきたいと思えます。どうかみなさま、今後とも変わらぬご支援、ご指導をお願い申し上げます。

10年のあゆみ（監督回顧録）

青春のパライストラ、to be continued…



関西大学レスリング部
監督 安田 忠典

関西大学レスリング部は、4年間という人生のうちの限られた時間を、ともに切磋琢磨して過ごす「青春のパライストラ」です。わたしたちは、学生スポーツという独特の文化を背景としたこの「青春のパライストラ」で、人格や自信、信頼といった人間性の根幹を育むことができました。この素晴らしい環境を未来へ受け継いでいくことが、監督としての使命であると考えています。

社会の変化は急激で、人々の価値観や倫理観までが揺らぎはじめた21世紀ですが、生身の肉体をぶつけあうという原始的な競技であるレスリングを通して学ぶことは、今後も普遍的でありつづけるはずで。しかし、その一方で、学生スポーツとしてある以上、同じレスリングを通してそれぞれの大学の文化や気風があり、とても個人的でローカルな一面があります。普遍的であり、なおかつローカルである、これがスポーツ文化の持つ一つの特徴ですが、関大レスリングにもそれは当てはまると思います。

人としてとても大切な多くのことを、相手を倒すトレーニングから学ぶというのは、何か矛盾しているように感じられるかもしれませんが、優しさ、共感、いたわり、気遣い、辛抱などは、机の上で文字から学ぶことはできません。激しく戦いながら、しかも互いを認め合うという経験は、人生を豊かにする上でたいへん有意義なものであるし、それは洋の東西を問わず、すべてのレスラーが共有できる普遍的な価値観でもあります。

そのレスリングを、千里山の「自然の秀丽、人の親和」を謳う地で修練するのが、わが関大レスリング部なのですが、そこに

は実に深い味わいがあります。本当に個性的な学生が集まり、多くのドラマがあり、汗と涙があります。そして、勝利へのあくなき執念があります。もう60年もこんなことが続けられてきたのだと思うと、いささか感慨深いものがあります。

しかし、60周年を迎えた今、感傷的になっている場合ではないのかもしれない。回顧録にも書かせていただきましたが、わたしたち関大レスラーには、揺るぎなき信念が共有されてきました。そしてそれは、現在も間違いなく継承されています。現在監督を拝命している私は、この大切な信念と伝統を、新たに「青春のパライストラ」を訪れる若者たちに伝えていくという使命を果たすために、全力を注ぐ所存です。そして、それはもちろん、すべてのOBの方々のご指導、ご支援があつてのことです。とはいえ、わたしたちレスリング部OB以外にも、じつに多くの方々に支えられてこそ今があるのだと思います。みなさま、これからも「青春のパライストラ」を応援してください。

末筆になりましたが、至らぬ監督としてこれまでみなさまにご迷惑をおかけしてきました。これからも山のように課題がありますが、それらを克服しながら、学生たちを支援していきたいと考えております。更なるご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。

関大レスリング部はこれからも走り続けるでしょう。「千里の道も一歩から」、ドラマはまだまだ続きます。

10年のあゆみ（監督回顧録）

青春のパライストラ 1998-2007

底辺からの再出発

記念すべき創部50周年を迎えた1997年度の春季リーグ戦。わが関西大学レスリング部現役は、部員不足に喘ぎながらも皆必死で闘ったが、結果は2部リーグ最下位となってしまった。本来ならここは、いくら体育推薦を失って以来長らく低迷してきたとはいえ、2部優勝、1部昇格で50周年に花を添えなければならないところである。

しかし、このときわがレスリング部は、創部以来おそらく2度目になるであろう、存亡の危機を迎えていた。当時の陣容は、4年生不在のうえ、リーグ戦に出場できる男子部員はわずかに4名、それぞれ力を付けてきてはいたものの、部活動としては廃部寸前の状態まで落ち込んでいた。

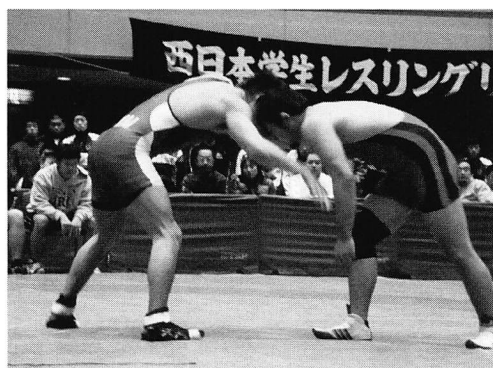
時代はバブル期を経て景気が後退するさなか、若者たちは体育会の厳しい鍛錬や人間関係を敬遠し、就職のための資格取得や、学費をかせぐためのアルバイトに流れはじめていた。一方で学生スポーツは専門化が進み、推薦制度を持っている大学が高いレベルで覇権を争うという流れが一段と加速しており、推薦枠を持たない当時の関大が追従できる状況ではなかった。

これは指導陣の言いわけではない。客観的な状況分析である。事実、レスリング以外の大方の部も、同様の不振にあえていたのである。しかし、なかでもレスリング部は深刻な時期であった。「このままやったら、廃部になってしまうかもしれへんな。」「そうですね。とりあえずリーグ戦は柔道部から助っ人に来てもらえることになりました。」「途中入部でもいいから、体育の授業で探してみてよ。」当時の監督横山とコーチであった安田との会話である。人数が減ってくると、どうしても「負のスパイラル」に陥ってしまう。ただでさえ少ない部員が、

些細なことで退部していった。4年生の主将が退部したときには、さすがに指導陣一同言葉を失った。51年目がレスリング部最後の年になるのか。あまりにも厳しい新たな出発であった。そして、この苦しい状況に出口があるなどは、当時は誰にも思えなかった。

スポーツ・フロンティアの時代へ

ところが、1999年に国立大学の独立行政法人化が検討されはじめ、大学経営にも本格的に競争原理が導入される気配が濃厚になってくると、学生スポーツに対する大学側の見方に変化があらわれてきた。スポーツが活発な大学は、活気があり受験生に人気が出る。スポーツが強いと大学の名前がマスコミに露出する機会が増える。学生スポーツが、大学経営に対して多大な貢献をすることが明らかになってきた。そして21世紀を迎え、大手私立大学が競って競技スポーツを強化する時代が到来した。



1部リーグで強豪と闘う時代がやってきた。

わが関西大学も、2003年に公募型の「スポーツ・フロンティア（SF）入試」を開設し、レスリング部には翌2004年度からSF入試によって高校レスリングの優秀選手が入学する運びとなった。ちなみにこの年入学

したメンバーが4年生になった今年、すなわち全学年に推薦の選手が揃った時点で、きっちりと17年ぶりとなる1部復帰を果たしてくれたのである。主将森山を筆頭に、井上、吉川、米山、小原、濱崎の6名は、ちぎっては投げ、投げては抑え込みの大活躍でリーグ戦を席卷し、胸のすくような勝利の連続であつという間に階段を駆け上がった。多くは語るまい。メンバーが揃えば勝つ。関大レスリングの実力と伝統は途切れていなかったのだ。

じつに、前回2部リーグに陥落した1992年から昨年すなわち2006年までの15年間、3名を超える男子部員が卒業した年は一度もなかったのである。(この間の事情については50年史『青春のパライストラ』p52-54の横山の回顧録「冬来たりなば」をぜひ再読いただきたい。)

それだけに、このつらい時期を、なかなか勝てないなかでもあきらめずに最後まで闘い抜いた部員たちには、最大級の賛辞を送りたい。君たちが勝てなかったのは私たち指導陣の責任だ。しかしわが部が60周年を迎えることができたのは、君たちのおかげだ。本当によくがんばってくれた。ありがとう。



臨戦態勢「うっしゃ！」

以下に、この10年間のあゆみを振り返ってみたい。すべての思い出深いエピソードを語りつくせないのが残念であるが、どうかお許しいただきたい。いずれOB会に集い、

杯を交わしながら思い出を語り合うことで、筆のおよばないところを埋めていただければ幸甚である。

すばらしき伝統の継承

1998年には久しぶりに多数の新入部員を迎えることができたが、高校の優秀選手を揃えているトップグループとの差はあまりに大きく、2部上位さえはるかに遠く思えた。この年のレスリング部は、工学部で、しかも浪人を重ねて入学してきた高齢主将の甲斐を二人の女性がよく支えた年であった。試合では関大初の女子選手岸本が気を吐き、マネージャーの飯田は学連の中心人物としても活躍してくれた。

また、この年から、長らく顧問としてわが部を見守ってくださった高堂俊彌先生(商学部名誉教授)に替わって、前総監督の伴義孝先生(文学部教授)を顧問に迎えることができた。以後伴先生は、わが部の顧問としてはもちろんのこと、2003年度より西日本学生レスリング連盟会長、そして2005年度からは全日本学生レスリング連盟会長として、現在に至るまで学生レスリング界を牽引して下さっている。しかしながら、その伴先生を支えるための、あるいは伴先生ご自身にとっても最大の関心事であったであろう「現役の活性化」だけは、遅々として進めることができなかった。

そのようななか、吉井、立澤のツートップが率いた1999年度の秋季リーグ戦で、留学生ダニエルや柔道部からの助っ人伊賀君の活躍もあって、2部リーグ3位を獲得できたときの感動はひとしおであった。とくに吉井と立澤は、関大全盛期に劣らぬ練習量を負荷しても黙々と耐え続け、一度も弱音を吐かなかつた。その結果、吉井はチャンピオンと僅かに1点差の西日本3位、立澤も国体代表となるなど、当時としては非常に目覚しい結果を残してくれた。4年生になった立澤が、国体予選で1部校のちびっこ

王者出身選手を完封した試合など「これが関大のレスリングだ。」と胸を張って言える素晴らしいものであった。確かに小さなチームであったが、そこで育まれたスピリッツは、長らくわがレスリング部で受け継がれてきたものに間違いなかった。

しかし、部員不足の苦しみはさらに続く。翌2000年は卒業生を送り出すことができず、リーグ戦も下位に低迷した。2001年には、当時としては異例ともいえる3名の卒業生を送り出すことができたが、リーグ戦は春秋ともに5位であった。ちなみにこの年の3名の卒業生は、関が沖縄県協会の理事として、浅井が地元岐阜でちびっこのコーチとして、そして比与森が本学コーチとして、現在もレスリングに関わり続けてくれている。彼らは、近い将来、若手OBの核となってくれるはずである。

2002年には、久々の女子選手竹中がJOCチャンピオンとなったが、主将遠藤をけがで欠いた春季リーグ戦は全敗で2部最下位という苦杯をなめた。しかし、もう一人の4年生松浦を軸に高知県宿毛で合宿を張って強化を図り、遠藤も復帰してきた秋季リーグ戦では、しばらく負け続けていたライバル関学を圧倒、会場は興奮の坩堝と化した。この関学戦で遠藤はけがを再発させてしまったが、関大の4年生は強いという伝統を、身体を張って示してくれた。

翌2003年に主将を務めた古川は、2年次の体育の授業で抽選漏れのため仕方なしにレスリングを履修していたところ、面白くなって3年次から入部してきたという異色の選手であった。それでも彼は、わずか2年間で見事な筋肉の鎧をまとい、大学発の地域密着型レスリングクラブ「関西大学レスリング・フォーラム」立ち上げにも尽力してくれた。大学からレスリングを始めた彼らにとって、関大レスリングファミリーを充実させようという、このユニークなレスリングクラブの趣旨はよく理解できるものだったようである。また、もう一人の4年

生小河は、そのユニークな風貌とキャラクターで他大学や一般学生の間でも「OG」のニックネームで有名であった。最後の試合で見せた見事な受け身は、応援していた者全員をなぎ倒してくれた。ここに記して歴史に残したいと思う。



東亜大学で合同合宿（2002年春）

続く2004年は、わが部として初のSF入学生を迎えた年だが、4年生は竹山一人であった。一般学生の中でも華奢な方であった彼が、厳しい練習にも音をあげず、こつこつと取り組む様には、レスリングというスポーツの本質を見る思いがした。その竹山は、2001年度に関西大学、関西学院大学、同志社大学のOB会によって立ち上げられた、大学から競技を始めた選手だけの大会「アルキメデス杯」の最軽量級を3度制している。4連覇でないのには理由がある。彼が3年生のとき、ロードワーク過多が原因で「コンパートメント症候群」という難病に罹ってしまったのだ。彼の脛に残る大きな手術痕を見るたびに、未然に防いでやれなかった指導陣の力不足を申し訳なく思う。その治療中に彼が「あの医師は競技というものがわかっていないんですよ」とこぼした。「競技をやめれば治る」という医師の助言を受けての言葉だったのだが、竹山の強い気持ちをよく表していた。そして最後の年、竹山は見事に復活した。魂は確かに伝承されていた。

2005年、SF二世代目が入学し、徐々に戦

力が充実してきた。リーグ戦は春秋ともに2部3位まで上がることができた。4年生としてクセモノ揃いの経験者組を見事に率いた宏太郎と嘉仁の二人の山岡は、ともに傑出した人望を備えたリーダーであった。しかし、よりによってこの小さなチームに同姓の二人が同期で集まるとはよほどの珍事であろう。ちなみに二人に血縁はないが実家は近所である。とまれ、この両名が、高校時代からレスリングを経験してきた選手たちに関大の伝統を叩き込んだ。部の雰囲気がかかりと変わるほどの激動期に、一番大切なものを、そと後輩たちに手渡してくれた二人には感謝の言葉しかない。また、竹中、平松の女子マネージャーも絶妙の腕力感でよくチームを支えてくれた。こうして関大レスリング部は新しい時代に突入していったのである。

そして2006年の部員たちは、リーグ戦こそ前年同様の2部3位にとどまったものの、女子選手前原の世界&アジアジュニアチャンピオンを筆頭に、前年の大野に続く中西の西日本カナダ遠征選抜入りなど、チームが躍進期に入ったことを実感させるに十分な活躍ぶりをみせてくれた。しかし、その華やかな活躍の陰では、じつにさまざまなドラマがあったようだ。主将の大野は、高校時代には他大学からも声がかかった有望選手で、2003年の第1回SF入試を受験したが失敗、復活をかけたAO入試で文学部に合格した。当時は素人ばかりのチームで、監督も横山から安田にバトンタッチしたところと、いろいろな意味でまだまだ環境が整備されていなかったのだが、同期の高校経験者であった漆原、素人から入部した新元、奥野の両名とともに、よくがんばってくれた。もしかしたら大野は、環境のよい他大学に進学した方が、レスラーとしては伸びたかもしれない。しかし、彼が卒業のときに「関大に来てよかったです」とささやいてくれたなかには、中身の濃かった4年間(在学は5年間だったような…)すべてが詰

まっていた。開拓者としての誇りに満ちたこの年の4年生の面々は、疾風怒濤の激動期を駆け抜けた熱血漢たちであった。

輝ける未来に向けて

こうして振り返ると、やはり苦しい時代であったと思う。かつて体育推薦を失って以来、苦しくない次期などなかったといってもいい。たまたま今、いろいろな条件が急激に変化し、確かにチームは上向きである。しかし、だからといって受け継いでいくものには微塵の変化もない。結果としての強い弱いなど問題ではないのだ。強くなりたいという意味を持った青年が集まって、切磋琢磨し、互いに成長していく場が、関西大学レスリング部なのである。

いま、スポーツの世界は迷走している。勝ち負けというわかりやすい判断基準を優先するあまり、ドーピングやラフプレーなど、倫理観に欠ける行為が横行している。競技種目によっては、当然のように法外な金品が飛び交う。指導者といわれる人々の中にも、中高生や、あるいは小さな子どもにまで過度なトレーニングを強要し、「私が育てた」と自分の手柄にする者が少なくない。いったい私たちは何のためにスポーツをするのか。

関大レスリングが、どれほど低迷するなかでも継承し続けてきた精神こそ、このように迷走するスポーツ界に対して応えうる、恐らくはたった一つの完全解答である。私たちは揺らがない。私たちが培ってきたものは、たんにスポーツの世界だけでなく、多様な価値観の濫立によって混迷を極めていくであろうこれからの社会を生きていくうえでも、揺るぎない信念として、巣立っていったすべての仲間の心血に流れ続けるに違いない。

このような確信を持って61年目を歩み始めることができたのは、学校法人関西大学、そしてOB各位、さらには関わっていただい

たすべての関係者のご支援とご尽力の賜物である。この場をお借りして、衷心より御礼を申し上げたい。

「ありがとうございました。引き続き応援してください。また歩き始めます。千里の道も一歩から…。」

(文責 横山博行 安田忠典)

余 滴

2003年に「関西大学レスリング・フォーラム」を創設した。これはチャンピオン養成機関ではない。切磋琢磨する仲間の年齢制限を緩めただけだ。大学生以外にも、この素晴らしい経験ができる場を広げたい。ちびっ子でも、その家族でも、他大学のOBでもいい。関大レスラーといっしょにやろう。そのことで、関大レスラーたちも、多くの経験をさせていただける。そして、生涯にわたってレスリングと関われる場ができる。「関西大学レスリング・フォーラム」は、関わりあうすべての人々が、人生を豊かにするため

のエッセンスに触れられるような、未来に向けたスポーツ文化の発信地となるであろう。



ちびっ子たちが集まってきた！